

少年時代の思い出

盛田 常夫

数年前に久しぶりに郷里の高岡（富山県）の市内を散策した。もう二十年近くも離れていたし、その前も実家に立ち寄るだけだったから、町並みをゆっくり見るのは大学卒業以来のことだ。それから勘定すると、三十年近くの歳月が流れている。なんだかすべてが小さく見える。子供の身丈で見ていた所為だろうか。それにしても、通りが寂しくなった。日中でも人が通りにいない。子供がたくさん遊んでいた昔が懐かしい。

僕らはいわゆる団塊と呼ばれる世代。それも団塊の最初の学年だ。とにかく当時は子供が多かった。町のいたるところで、子供が遊んでいた。長嶋や王が野球選手になったのは僕らの小学生時代で、プロ野球の黄金時代だった。テレビが普及し始めた頃で、長嶋の天覧試合のホームランはうどん屋のテレビで見た。力道山のプロレスの試合になると、テレビを持っている家に集まって、近所の人たちと一緒に見たものだ。

子供の夢と言えば、プロ野球の選手になること。時間があれば、三角ベースでゴム球を竹の棒で打っていた。学校でも朝の授業前に校庭で野球に興じ、何度も始業時間に遅れた。そのために全員が分厚い本でビンタをくらったことがある。小学四年生のことである。あの痛さは忘れられない。それほど皆、野球に夢中になっていた。

小学時代を通して、僕のポジションは長嶋と同じ三番サードを決まっていた。夏休みになると、小学校の町内区域で区切った町内対抗軟式野球大会があり、小学生二名と中学生七名の構成で町内チームを作る。二〇世帯しかない僕の町内には同年代の男の子がおらず、隣接する町内チームのメンバーとして、小学五年から中学三年の夏までこの行事に参加した。夏休みが始まると、早朝から昼過ぎまで、小学校のグラウンドを取り合い、練習試合をする毎日だった。泥んこになるまで、毎日遊びほうけた。内風呂も水洗トイレもない時代だから、たらいに水を張り、体を流すだけだったと思う。

午後になると、路地の日陰にゴザを敷いて、将棋やトランプをした。年上の男子たちが準備してくれ、それに加わって遊んだ。それに飽きると、オリンピックと称して、立ち幅跳びや三段跳びを競い合った。まだ日本が貧しい頃だから栄養状態は良くなかったが、足腰だけは強かった。運動会でも徒競走に強かった。中学に入ってから、年に二度ほど開かれる市内の陸上競技会に学校を代表して参加した。陸上競技部があったわけではないが、各運動部から足の速い者が競技会に駆り出された。義経が雨宿りしたという雨晴の海岸で、夏休みの時間を過ごすことも多かった。新聞社主催の行事が開かれ、「黒ンボ大会」や相撲大会にも参加した。砂の上の取っ組み合いで、三人だったか五人続けて破れば賞品がもらえた。大学で教鞭を取り始めた頃に、学生を連れて千葉の海岸へゼミナール合宿に行った時のことだ。私がまだ三十歳になる前で、学生ともほとんど歳の違いがなかった。この頃はまだ砂浜で相撲をとって、三～四人相手に取っ組み合いしても負けなかった。

とにかく、小学校から中学校にかけて、頭を使うよりは体を使っていた。それが逆転す

るのは、中距離走で腰を痛めスポーツを続けることができなくなり、思春期の精神的な成長が芽生えた高校時代である。硬式野球部への入部を断念し、受験競争を如何にしてうまく交わして過ごすかを真剣に考えるようになってから、価値観が変わった。文学書と歴史書を貪り読み、なぜか英会話にのめりこみ、英文の長文だけを読むのが私の勉強だった。そして、このスタイルに合う受験科目を提供しているのが、国際キリスト教大学だった。

腰を痛めてから何年も、徒競走で足が空回りして苦しんでいる夢を見た。腰が痛くて、速く走ろうにも走れないもどかしさから解放されることがなかった。かなり歳をとってからも何度も同じ夢を見た。今ロードレースに夢中になりだしたのには、それなりの理由があるということだ。何度もフラッシュバックする悔しい夢物語が、次第に過去のものになっていく。失われたものを少しでも取り返そうという心の叫びなのかもしれない。